江戸樂舎用

文政十二孟春新鐫

玉川先生著

道話

俗編

本心堂藏版

江戸樂舎用

道話自脩編

上

江戸樂舎用

文政十二孟春新鐫

玉川先生著

道話 自修編

本心堂藏版

自修篇序

玉川先生年過四十。卒然遇疾。當其劇也。猜忌百端。視家人秤藥勸藿食則疑其毒己。聞畜狗之吠則恐其反噬己。恍惚間枕上猶書忠孝兩字。心記心目觀之口誦之而不少惜及其疾已復故。健啖如舊也。則

江戸樂舎用

雖藉於湯液針灸之力。全蓋有一點靈光不可澌滅者存焉。於是自稱再生翁。又遊兩總間。故人門生皆喜而延之下絳帷。坐皐比揮麈說經。其言近而旨遠。約而義盡。聽者悚然敬服。或有慙心前過而泣下者。其羈旅草野。艱阻多憂之間。猶兀兀枯坐執管著書。其書次第成編。凡數十部。斯編所尤加意也。首明綱常彝倫所以不可一日離心。義終言士民日用常行之道。其條諸身。措諸事業之法。粲然明悉。言各有條理。又豈可以常談比常體論哉。孟軻氏曰。言近而旨遠者。

江戸樂舎用

善言也。謂至道存於邇言也。余於此編亦以是議之。先子嘗叙玉川百詩曰。志於正大有用之學。讀此編者自知其非過論也。

文政戊子冬十月

綾瀬寛田梓識

我玉川先生以實學立世。甲申五月病中風。手不持匙。不行飲食。以待人而後下喉。又善忘。玉國字と毋小児所知者不復記。飲器食具平常所用者不省知其名目。必問之細君。隨記從忘。虚耗可知。昊天不弔。道當其辭。仕之日。又會僦居為人所奪。於是去養痾。葛西新川少焉。天道與善。其病日間精神漸復。乃與痼

江戸樂舎用

遊歩羈旅之日乃錄其所常講著爲自
修篇若干卷蓋先生曾曰天地萬物之
總名心者萬事之總名乃其深於心學
於是可觀也又去都下日雖極單貧志
償宿債不遺又流離艱屯中猶能邮
其親族之乏困苦告者其實際交用豈
可不敬服乎烏乎有德者必有言如其新
著自修篇有裨益于世苦疑也於是徳

史先生刻行之謹爲之序

文政十一年歲次戊子秋八月

上總東金　長谷川五平撰

江戸樂舎用

玉川先生やまひよりつひてしきそれ
きもいのちをおしまるるのち
れをいかんとすれとも
なをひとすらの国よりかんみつ
をかけて命をひろうたひの申て
よかるへきかつてそれてんせれつ
ふ彩を自脩菊をもつてはれる
まゝ名ひ人をこそうあてをも
よのひとのをくへきをいひをにせきをみ

江戸樂舎用

まことにかるくしてかなしきは人をのそんとつとめたるこころもちをもつてのまことたるこころのかたちをまもるにしかしていまれ筆をとるものなん

竹梅堂主人

文化六歳 石川雅望

自脩篇目録

上之巻

○父子 初丁 ○君臣 十五丁

中之巻

○夫婦 初丁 ○兄弟 八丁 ○朋友 十二丁

○士 十五丁 ○農 二十三丁 ○工 三十二丁

江戸樂舎用

○商　三十三丁
下之巻
○學習　初丁　○経濟　六丁　○釋教　十丁
○旅困　十二丁　○養生　二十丁
右十四篇

目録終

自脩編巻之上

武藏　玉川小町雄八著

父子

夫父子君臣夫婦兄弟朋友此を五倫と云尚書の大典(たいてん)五常(ごじょう)。共小同一義なり。堯舜(ぎょうしゅん)以来聖々相承(うけ)の道(みち)。父子の間(あいだ)は親(しん)を主とす。君臣の間は義を主とす。夫婦は間(あいだ)を別(べつ)を主とす。兄弟乃間は序(じょ)を主とす。朋友(ほうゆう)の間は信を主とす。此五のうちを分(わ)つて云(いう)は三つとなる。父子夫

江戸樂舎用

婦兄弟ハ閨門ニ属し。朋友ハ郷党ニ属す。倫序の義ニて人ハ次第を立て教へるものハ。聖人の次第を立て教へるものハ。固より人乃性ハ善なるゆゑ也。故ニ司徒官を設け教ヘ人倫を明ら。嗚呼盛徳神智ニあらざるよりハ。誰か能く是ニたゞかんや。此を一日も無んバなるべからず。人一日も行ハずんバ有つべし。故ニ此道ニ由らざれば。国必治まらず。家必亦のちび。身必ず修らず。此道立て而後ニ。人く禽獣夷狄の行を免る。善悪欲し不善を恥ること。是也。固有乃善あれバ。今人果して。此道を強め堅く守を伝せバ。終ニ賢哲の域に至らんか。余嗚呼かすゝきこゝろハあまごゝ。嘗て数語をつゞて。小子後生を開導す。其語ニ曰く。父不慈子孝。慈ハ父の不足。子不慈父之不慈。慈孝之不足。君不慈臣之不忠。慈ハ礼の不足。君之不礼。慈ハ忠之不足。夫不慈婦之不柔。慈ハ和之不足。夫婦不慈夫之不和。慈ハ柔之不足。兄不慈弟之不悌。慈ハ友之不足。弟不慈兄之不友。慈ハ悌之不足。朋友不慈彼之信不足。慈ハ我之信不足。と。是全く。聖道の五倫を本據とする也。○孝経曰。父子之道ハ天性なり。と。自然の出るもの。皆天性なれども。父子の間ハ格別乃譯有を以て志うのたり。父慈悲の心を以て子を育するハ。是父の恩愛ニ二つあり。

江戸樂舎用

姑息の愛なり。正道の愛あり。婦人女子の愛を姑息とす。心の檀弓に細人を事とするハ姑息を以てすといふ。易の蒙乃卦の象小蒙ハ正き養ふハ聖の功なり。蒙ハ蒙昧の蒙なり。童蒙幼稚の時を云。その教育乃大切小致を不ハ唯この時よあり。父母たるもの務て心をきに者すべし。父母その子幼稚のときより。正道を以て教育するときハ自ら善を欲するの心生ず。其長ずるに隨て。宗族郷黨隣里その人となりを稱し。名譽聞ゆるに至り。終小安寧の福を享け。長壽の齢を保つことあるべし。能くかくの如くに至るものハ。是全く教育の善きに由るべし。故に父ハ父之道を盡すべし。

其道盡すときハ。豈不孝の子あらんや。其善惡吉凶禍福一生涯のこと。只幼稚のときに教育に在のこの時を疎畧よすべ。是を過ぎて以往ハその教行格しとなり難し。然ども壯年始て教を受るものあり。時後れたりとて必教の行き届かざるに隨ふ。其人に心がけ次第小由る。又其性質教育を假らずして自ら善きものもあり。高適の五十にして始て詩を作りて少陵小推され。老蘇三十小して始て書を讀ム。歐公小許さる。其二子蘇軾蘇轍親子三人文学を以て其名天下を動せり。其外晩学小て高位顯官に上り名を成すもの幾人か數へべし。夫人ハ活物なり。萬物の靈なり。心がけ

江戸樂舎用

小より此やうに成るの昨日までの不善人今日は善人となるなり。日々の變化考へずんばなるべからず。是を要するに必童蒙の時なるは。天下の父母たる人の大務なり。怠かせなすべきことの第一は人々子を愛するに姑息を棄て必正を以て教育せよ。孟子の母孟子を養ふとき。居を移すこと凡三度なり。其風俗仁厚の里を擇んで。其子を置んが為なり。事は列女傳に詳なり。孔子も性相近習相遠と仰られしこと誠に善に交まれば善人となり。不善に交まれば不善人となる。必其習俗に由るべし。孔安國の註に。其習ふ所を染と云へり。人の性は善にして悪あることなし。唯其習染によりて。格段の

差別なり。格段の悪を為すに終に千里懸隔たるの遠きに至る。諺に云はずや。人は氏より育ると史記に水は方圓の器に随ひ。人は善悪の友に由ると。心は水の圓くなるも四角になるも人の所為なり。人も水のごとく幼稚乃ときより善人に交まれば善をなし。悪人に交まれば悪をなす。其交る所の人次第なり。豈恐まざる慎むべきことなるべしや。○さて高貴なる人の子は幼稚より耳に悪き話をきこせざる。目にあきれたるを見せず。行義作法を教へ。其誕生の時より師保を傅けて夫この如く油断なく教育する者。微賤匹夫の生涯より失徳をおきることなし。唯よく教を受ると雖得ざるのみならず。小児たるときそれ糞雑汚穢の衣など纏

江戸樂舎用

天日晒し。其屎尿等を慎むと雖知らば。天地二光の畏るべきを也
志べし。匹夫下賤の身。勢ひ止むことを得ざる出るとは雖も。かゝの
如くなれば。其人となることを甚難き事なり。さて子を養ひて有用の人
となさんと。善き人と為んと欲する人天下の人の父母たるものゝ志なり
ども育て上げ見留て存しの外の不善人となる。貧苦微賤の
身わゝ子を育すること多子あれば。いうにも骨折と言べし。然るに
育てはぐゝ其甲斐なきは最も哀むべきなり。是は父母教育
の法を知らざるなれば。第一教育残失る咎己にあるなり
知べし。及て曰く我辛苦して育て上げたれば。不善なるは彼が固有の

性なり。如何とも為がたし。と云。其愚なる言なるかな。其甚しき
小至て久離に及ぶことも有り。苦々しき事にあらずや。夫小児を最扱
ふべし。温柔を以て養せよ。多言敏材は禁ずべし。其年を加へて従
て次第に厳正にすべし。假令ふも不善を諭すことあらば。幼稚の
時なれば。必忘れざる者なり。其見聞せること。皆心の体なり
なり。余を童習為心と云。是故に かりそめにも小児を欺くな
なれば。譬ば食物あるに。兒雖小無と問ふとき。汝に与ふる也
と答ふる時は。必是をあたへよ。瑣細の事なりとも。心を正して能養
べし。古人曰先入為主と。又ものの児と他の児と。この競争は。深法也

江戸樂舎用

為ることあまたび。其父母多く我子を顧ず。乞丐人の心力を却て我子を傷ふものゝ若し其子のために謀らば。事理の是非若亦正しに及ばず。我子を叱り戒めて。連も返るべし。罪を我に引きうけなば。德を養ふの大なるものハなし。然るに人の子の罪を挙げかばゝ。彼が父母に怨て怒り責ることのあり。何ぞ矣道理に晴きや。頓其子の我意不善に進むこと。鑑に向ふ見るごゝ如し。行ぞ其心づゝぎまれや。○さて小兒を教育すること。樹木に譬ふ。夫も樹木ハ始生の時あれば。性質柔軟にして。枝を曲て圓坐にかゝどる。幹を撓て物の状を作る。意の向ハ処に從て人工を施ることを自由に稍長大に至りて。人工施しがたし。其枝幹の向きを直し。態を易んと欲すれども自在なるべし。人も甚通りなるものゝ幼稚の時に在て。人に随ふことを自由にして。教育施し易し。漸々に物心付くに随て。己が揑造を用ひ。偽りをまゝ。老成の表言格造を用ひ。自己の為にして善と思ふに至る。学に至るの中一と通りの教誨あて。間に合ひ兼ぬるものなり。

樹木人物ともに。いかに始生童蒙の時に。養を貴ぶことかくの如し。

○前段にいへる。児を善道に導びくに。行届かざる所をゝ。其行届ざるを顧みず。己れを天性自然といふ。誤と云べし。いかに過を我身に引きうけ。罪を己に帰せることをもて是とすべし。

江戸樂舎用

仁のなるに。老成人と相談すべし。さすれば間違ふるまひの無きものゝ。己が我慢を立て。人に従ふことを欲せざるゝ。その如何ともかゞきに至て。終は天命に帰せる。これ天命といふ事を解せざるゝ。宋儒言はるゝ人事を尽して。天命に至ると。一生の中に人事の一をも尽せることあるに。孝の事。忠の事。家業のこと。養生の事。数々ある。一をも明らかに極めぬ。この人事を法りはてのちに天命自然を説くべし。こゝを如何で。漫りに天命をいふべきやなげかわしき事ども。試に世を論ぜん。今夫樹木のよく活くるも。その根を毀ひ傷まば立どころに枯る。よく培養せば盛に

成長せむ。又農夫二人田畴を耕すに共に始る時同じ。一人は出精して疾く務め。一人は不精にして怠る。其秋熟の時に至り。出精のものゝ穀を収る人は満足して。不精の者の穀を収る人は嘆息して。不精の者の穀を取る。是ざる我憂て怨咨せん。元稔る方修りのみも同じ。又二人同行して同刻に遠一人は目の力を窮めて行を急ぐに。一人は慢怠後歩して急る。故に彼は千里の遠きに至れども。此は甚まるも及ざるべし。是皆人事と自然との分なり。ゆゑに他を棄て我をせよ。罪を己に負ふ事を人事といふべし。○大約児は九歳に及ば。或は文武或は手跡算盤一切の技芸。其才性のちからに従て。師に教て学ぶ。性は生て

江戸樂舎用

其父の心より其子の上達を願ハざるハなし。是人情の自然にして子を思ふの志萬きこと甚だ美し。志うれども子弟ハ心のゝ有て。師を敬まるの實うすれバ子を思ふこゝろ益なし。既ふ子弟に代て師ふ任ずるかゝハふ師ふ投げまゐらせゝ。師の志ふ從ハゝ。さて又児ふ命ずるに教んで師命を受け。日〳〵尊奉して惰ふ事なきを期ゝ。孝子曰民生於三。事之如一と。父生ぐ師教ゝ君食ふ是皆生ものの族ゝ故ふ生於三と云。故ゝ父師君の三ふ事ハ一様ゝと云ゝ。能〳〵是等の後を深くふりゝ閑ぶべし。其家姑息なるゝ愛ゝ児の心驕怠ゝ。師乃背怠ふ事あり。如何なる恥ハ何ぞ其子の上達を願ふゝ豈得べんや。且微賤の者の子弟などふ至てハ師ふ事ふるの礼を考ゝ。道の貴き事を辨ゝ。かのゝなゝ師ふ亦教育の道を解せざるゝのあるて束脩の多寡ふよりて弟子を遇し。弟子亦多寡に依りて師取をゝ。是程の暗を不羅して卒ふ師弟のる市井の交易のゝなゝゆきて仁義の事を考ゝ。未情多きものハ上たる。寡きものハ下ふ坐せむるに至り。其應對交情悉く束脩の多寡ふ由て。實に恥づべきのあるゝ。夫師ハ一心ふ教育するのゝ我思ゝ。未脩

江戸樂舎用

の多少拘らるものなるべし。又弟子ハあぐ師を忘るゝと雖思て。束脩を出さゝる者多し。師の危難困苦あるを見ぬふ。財力を捐て是を救ひ。身命を舍て禦ぐの色ゝ。然るに解せざるものハ唯餬口賣買のやうにおもふ。師の却て弟子の意を承て誨を施すなり。其色の法の地を掃ふ衰廢せざる。其甚しきに至ての弟子己が門を離れて。他に去ることの恐るゝ。甚志一に束脩の在て。道義の重き忘却せ。嗚呼師恩の行はるゝ已ぬかな。○其子を穏當になさんとおもふ。甚志鄙劣なるハ小養べし。先師に贈るの束脩金帛の多寡決して子に對して治る事をせざるを法とする初する時の道を軽んじ師を蔑ろ心起とあり。故筭數の術ハ学ばしむべし。出入筭用等のハ謀加せしめ。損得利用のミハ。彼も成長するに従て。自然に覺る。童蒙を教育するの先務なるべし。○古ハ子を易て教ること如何となれば。父子の間ハ恩愛殊主なり。自ら責ゝ嚴重に苦をせ。痛く是非を糾して。従ハざれバ楚撻を加ることあり。是天倫の恩を棄るに至る。且父子ともに室に居る。父の仍状悉く道によるとの中も非也。其子也殊ゝ。父の非を咎むるの心生じ。又見在にいさゝ怨をいだくもの。

江戸樂舎用

是父子の間の乱れ生ずるなり。又古人曰子を易へ妻を換へハ男女陰陽のたがはんと云へり。夫丈夫臨で憚りなく内外隔さず。何事も正しに帰して礼を告げ博く道理を知るを先とせといへども。其淫奔猥雑の甚しき所に至てハ。なかなかさまた陳べ難きなり。故に其子を易へ妻換ることハ。妙術にこそ。一儒生ありて。父子兄弟並び坐する時ハ。詩の国風を講ぜず。我いまだ其是非を詳かにせざる也。

夫天地ハ大父母。父母ハ小天地。天地次ぐ者ハ父母の徳。父母ハ天地小受て我を生む。父母子孫得んと欲してあらざる子もなく

生まんと欲して能ハず。人事のなす所にあらず。妙合自然の致す所なり。凡天地の事ハ。天と人と相合して成る者なり。其實ハ太極の一なり。天地絪縕を顧慮すべし。故小聖人孝道を立て教へ。先ずハ天を畏敬す

孝義。○扨妊て胚胎せしより月辰小至るすべて三百日の間。其労苦まるるいかばかりぞ。子胎内小在て形を備具せ。母ハ飲食を絶ち。身体を疲悴し。飲食を絶ち。坐卧行立心を用ひ。安産を神鬼小祷り。巫医に託し。又其形体不具を畏る。心小期小及んで娩せれハ。又懐小在て母を職し。労せしること。大凡三年。其艱苦辛勤を忘まず。子孫育するハ。天然の愛情しからしむる所なり。故に聖人

江戸樂舎用

の制ハ父母没して。三年の喪服を定りて哀の心を動かるに由り。其報恩ハ盡たりと云ハ非也。父母の恩の洪大なる。昊天の極り無ごとし。唯万分の一を報ぜんとの制化に務ずんだらんかと。且其子性質軟弱なるあり。又強健なるあり。病なき病むあり。疵を患るあり。癲を生ずるあり。蚘虫を病むあり。其変故小違ことなく。皆生たるにあらず。又悲く労苦も。漸々生長するに随て。其才性の宜きに従て。諸藝を学ばしむ。成童に至り。父母少しく安心を得たり。終に成れ我児幸に不善をなさず。此すでに成人せり。宜しかんと云位の事。其人となるまでにたゞ骨折苦

労なること。言語筆墨の及ぶまたあらず。然るを世に多き族或ハ父母の恩養を軽重申し難き。我が父母の恩養軽く。彼ハ重く。其ハ厚く其薄しと云ことのあり。是決して二ツあるに同じ。別なき事なれども。是義理を思ハざるとの言葉なり。○夫震胎して継嗣を得ること。誠に神妙不可思議の理なり。天の授与なる有り。其子なるこの此一事を推して。父母のありがたきを仰き知るべし。其厚徳天地間に二ツなき恩なるべし。能く思惟すべし。○さて又其変を法に小違ひ。非道をなし遇せらるゝ。至て子不幸なり。不慈の父母に逢ひ。非道をなし遇せらるゝ。必ず怨心を生ずることなかれ。いつもし子の分を書き事なるべ

江戸樂舎用

いふ禎祥なり。父母なり。其至誠を感じて。豫を底さざらんや。古へ孔子天下不是底の父母無しと云へり。或曰。子より胎内あり。死せば父母乃恩徳あるもんや。予對曰。其体の臭き腐見ぶ。訣別は。必孔父子共不幸なり。極りて縁の薄く。成この哀情九回の腸を断たん。命の長短もんぞ人事の関係する所あんや。埋を以て其を葬

んか。其子既に胎内に次て。父母の徳を蒙る。何ぞ父母乃恩を忘

るゝを成得んや。況らの唯くして退く。○前段の云るが如く。父母を懐ひ子を育て。其丹誠覆育の力を以漸く成長せるを成得ん。然るに好色を知ふ為んぞ。忽父

母兄弟をすて。或家財を竊ひ。穴隙を穿て出奔せ。父母兄弟を辱しめ。郷党を欺き。齒せらるゝ。抱年の厚恩大徳一時に滅裂崩潰せ。

ずを存と知いなんや。噴父母積年辛苦の大恩と一時情慾の誓言と。孰れを重く軽き。其心の付さる。實に迷濛愚痴なる

心を矣。何ぞ其刃の上を思量せざるや。然るに彼れ悔を生ず

る。奔り回りて悪窮まり来せる。遂に天憲に触る。神祇の罰討を受け。道路に横たはる。溝中の瘠鬼となりて。恥辱をさらす

至る。是ものとして不孝の罪逆ならざるの明験に畏るべし。夫

情愛はかるゝ恩義はをる。父母の命をそむき。情慾熾盛

江戸樂舎用

乃癡慮ふかきの世を奔り従ふ。天倫をやるのなり。世教を害する大なるとのく。何ぞ長久を保の理あんや。夫父母の命を奉して婚嫁するとの全く義のよりて夫婦とをなる。これ長久継世の道なり。彼此義を重じて成就するとの聖人情を洞観し。媒妁の法をこしらへ。違てとなう言ふんとす。相奔誘して夫婦とするとの一旦水魚の交を結。子なを設けて娼妓をなすとのごとし。其子成童になんくるとき妻ひふ。妻没するとあれば。忽ち後妻を娶んと謀る。かる時工面あれば。其子を婚家に鬻ひて己ら欲を達すること。

尖人汚下の勢ひく。最初道ふ乖ひく夫婦のかくひをなすとの教一。絶ふ此に至る前妻在命無事教まの間ハ真實らしく見れた。其没するふ及んで本心を顕す。己が欲ふすう勢て子を告らふとのたのもしげあき心のとの豈まさ其後妻ふも實情あんや。後妻もまた豈其夫ふ實情あんや。○古人曰ハ人生十五年の間をもれば喜人の福を得。凶人の禍を得。其報應毫釐も錯ハも と。余三十年来心を用ひ試るふ報應の輪轉天象の著明なる絶觀なるを。帝舜の父を瞽瞍とうて。天性頑母も亦嚚く。弟を象とふ傲慢ふして。愛情礼義一毫もなく。

江戸樂舎用

至極よかゝざる人品こ。象父母とハかゝるこ。帝を殺さんとして。帝
をして井を浚ハしむ。帝の井を浚て脱出し給ハゞ。井を蓋
ひ埋めよと。又倉をぬゝめ。梯を引て火を放ちゝゝだ。皆能
大難をまぬかれしこと。是聖徒至孝の感應。天の冥祐を
得しこゝのゝ。かゝる不惡邪たの父母よ事まして。我孝の
足ざるやと。罪を負て田に往ゝ。旻天を仰き望こ。父母を呼
で泣き叫びわまた行の故也。父母の心ハ叶ハざるやと。天に訴こ
り。既ハ萬乘の君ハ位ハ。富貴栄華好色珍膳心の欲する所
のまゝなれた。敢て安ゝ玉ハゞ。孟子ハまた称ゝ。唯父母了

順ハゝ始て憂を解くに足るや。演説せり。故に彼の禎置の
父母傲慢の弟。皆化して善ハ。誠ハ萬世父母に事るの大
模範を垂き玉ハり。孟子又瞽瞍豫を底て。天下乃父子たる
ことの定るとありかゝきことなゝずや。然で父ハ父たゝずと雖
以て子の乃を責きでるへ。況んや。世人かつゝハも帝舜乃至孝を
思て。其第一を行ゞそれゞゞの福を得ることと疑なし。人ゝ
帝舜ハ則ち孝を盡さば。骨朽ても名ハ天地と共ハ盡き
さるべし。夫子を愛せるハ天然ハて。禽獸虫魚ハ至るまで
異なることなし。然るに帝舜かゝる不惡の父母ハ遇て

江戸樂舎用

るの人倫の変といふべし。其変ふ意ひ一心ふ孝道を尽して。終ふ父子の互を完めて。其明徳至て吉天下後世を照臨せり。願くハ此處を忽爾ふ看過ぜると勿れ。宋黄山谷嘗て其老親ノ病める時床側ニ侍して。醫藥食物自ら試く自ら看て。頃刻も左右を離さず。其溲尿ある時ハ手親ら虎子を奉持して之を取りて。其嗅氣をして人ふ知ラしむ。其自ら心を尽せること古ふ至る。豈これを純孝と云ハざるべけん。

や後人孝子二十四人を輯めて。以て書に著す。名付て二十四孝と云。其書帝舜ふ始りて山谷ふ終る。百千載人子たる者人の

弟たる者の亀鑑とす。後世を戒むる所以ふ。今人これを聞くに付ても見よ付ても大小貧富ふ拘ハらず。其親病ある時ハ。自ら分抱宣省して。其藥物食品ことゝ皆心を付て。此を奉供ぜ。たとへ老病なれバ其肌体垢臭あり。不潔なるを之のそなへ。或ハ悪疾或ハ奇病種々の患ふ遇ふて。長く人ノく痙ぎる者あり。其不潔なること言ふ及ハず。内外労苦多々なりと雖も之を厭ふの心を生ず。其看病ふ倦むこと勿れ。これを志ハ孰ふする者ハ。ただ人ふ欺ふ足ふ暗く。冥理を解せず。且親の為ふよりして。即ち我が為ふよりして

江戸樂舎用

親知せざるものなし。是樹木に譬ふるなり。祖父は根株なり。子孫は枝葉なり。其枝葉の盛ならんこと是根株を培養するに在り。慎まざんば有べからず。古人云呼吸喘息氣通於親と。これ父母と我と同骨なるを以て用示せるなり。然と雖も其徳を申べを立るに成較計るに至ては父の徳乃優まる事を知るべきなり。士章云君子は其敬を資り母中て其愛を資る。これを兼ねる者は父なり。これを兼ねるものは愛敬の二を指して云。愛は志しを事とし敬は礼なり。大切なること然いてなり。

君臣

大学に人の君と為ては仁に止ることに止ては何で恭敬恩愛の心を云。此心を以て下に臨む。これ人君の止る所なり。人を愛せんと欲せば先まづ親に悦まんこと欲せば先まづ己を敬せざるべからず。己を敬せざる人は愛せざるなり。己が身を責むる人は常に己が身を責まで世間に悪むべきの人あることなし。人に臨む人は愛せざるなり。己が身を責るには今日致したること今日致したること。皆我身に反して其行状志意に快きよりあるべきなり。理に背き常々ざるを自ら顧て知るべし。若己が心に慊ざることのなかるべし。

仍て人を責るに暇あらんや。己に慊くして人を責むべきこと道理なり。然るに是人君の位を失はば。雖きるに非ずや。其雖きる故の時

江戸樂舎用

ハ。其心自ら寛裕温柔ナリ。能く下を恕するの心有て。人ハ彼ふ此事我命。彼を命を受く。其事に従ふと雖ども。我心ふ苟らさんば。或ハ不豫の色を顕し。或ハ怒りを發して罵責し。或ハ打擲するふ至る。然るを却て痛く自ら怒を抑へ氣を収め。本末を反り己を責て思ふた我も亦先ふ是らの過あり。行ひ深く彼を咎めんやと心中ふ思ひ直せば。これを恕と云。恕の字。をんなかと訓ずるなり。やすくふるるこれを推廣めて。萬事にゆき渉まで是に即ち人君の德。然ればバ行事ことの爲ざるんや。行くか従ハざるんや。然るに一刑法を犯し。君上を侵くるものハ。遂に怒ガ。是止むを得ざるに出づ。又罪大なると雖ども赦さば。罪大なるを赦すべきあり。尚書小青災ハ肆赦し。怙終ハ賊刑ずと。又曰其不辜を殺さんよりハ寧不経ふ失せよと。是等の処ハ。仁恕より推し見ハかるひ有るべきことく。○古人山藪ハ疾を藏し。國君ハ垢を含むと。垢を含むハ勇氣也。勇に二ツあり。血氣と義氣也。善悪を分たず是非を顧ずして勝氣の張るハ血氣也。匹夫の勇。善を善として此ふ従ひ。悪を悪として此を去り。能く是非を顧て。己を舍て萬事宜きに従ふ。是義氣也。大勇。勇の字いさむと訓ず。善にいさみ進むを云。垢を舍て恥をあらぐハ勇。中庸ふ寛柔ナリ以て教へ。無道ふ報ひざるハ。

江戸樂舎用

南方の強くと。古人義勇を説きのふこと此の如し。恥を忍ぶべ垢を含まぬ。已ゞ言ひ出したることハ。善悪ともに推し通す。匹夫の勇を勇と心得るものあり。匹夫の勇ハ極りて無道短慮。故に多く禍を受て。寿命長からざるもの。義勇ハ裕然として心静。故に無事平穏なり。寿命長久なるものも。知らずんバ有ざるべ。○周易乾の九五に。利見大人と。大人とハ他に在らず。崇高富貴の位を指して云なれども。易の大人ハ仁徳ある人を云。然に殷の紂王ハ萬乗の君なれ共。孟子曰。聞一夫と云て。一夫とハ獨りものゝ云ことゝ。殷紂の富貴ハ眷属数多あり。夫を一人の者と云ハ何ぞや。億兆の人に一人も紂を

思ふものなし。唯あるハざる而已なり。心に怨み悪んで其滅亡を願ふ。これ一夫と云ふ故なり。無慈悲の甚しきものハ。其極り此の如くなる に至る者。夫天下の人各欲あり。欲ハ天の與へる所なり。自然の理なり。いかんとなれバ子生まれて。其母の天より乳汁を与へて。これを育せり。其成長に従て漸然として自ら生産活業を喻る。欲の若きなり。知るべし。然れども欲に二ツあり。正欲あり邪欲あり。正欲ハ道に邪欲ハ道にあらず。孟子年貢を取るの法を論じて。堯舜の法より軽くせバ大貉に貉なり。堯舜乃道より重くすれバ大桀に桀なり。又宣公十五年の公羊傳に。什が一ハ天下の中正なり。什が一より多くれバ大桀に

江戸樂舎用

禁じ。什が一を寡げまバ大貉小貉也と。知ずんバ有ざるべし。○聖人の詳に人情を知給男女の道ハ上下人情一体なるを知給。故に内に怨の女なく外に曠しき夫なくして志ひ。己まも寒くれバ人も寒く。己飢なやぐ人も亦なやぐを知る。故に民の好むする所を好む。詳に人情を通知して是を治む。故に民の上を戴く事其父母の如ク。一人も横行して背くことの有ことなし。民の君を視給ふ事ハ。如此なる時ハ西より東へ北より南へ。皆思ひなびかざるなし。如此して大人の徳といふべきなり。其ハ唯慈悲憐愍の心に出れ。豈敢仰ぜざらんや。夫民を治給ふを分て云ハ。法度礼儀を

辨ずると。人情を治るとの二ツ。刑政賞罰より貴賤上下軽重親疎に至るまで。夫々に格式を立て。其差別次第のたぐひなきハ。是堯舜以来國を治るの綱紀。一日も無の有ざるべし。其法度礼義の原本ハ人情。聖人々情に本ひて。法度礼義を立給ふ者。○さて人に貴賤上下の隔あるとて。雖も人情に貴賤上下の隔あることなし。故美食美服ハ下賤も是を欲し。大厦高楼ハ又下賤も是を欲す。唯下賤に出生したる故にせんかなく明らめ居るのみ。貴人ハ必美食美服をなし。下賤ハ必疏食敝衣して。美食美服のいなきものと云。是聖に非ずして。人ハ是を解知して。彼と我とのちがひを。誠に公平正大の

江戸樂舎用

心とすべきく。老子の彼我を玄同せる心。純人情を解せるとの也。世の最汚きと嫌んぜる。乞食非人も人情をいくらかは。其幼稚より姦を受け。心を磨き。投じて務め励む時は。勉強秀材多くなるべき。人情行人は萬物の霊なれば。行でこれを強吐きして憎まん。夫人はいかく皆同物なれて。天の気を稟し。地これを育こ。南風吹けば同く南風を受て煖なり。北風吹は同く北風を受て寒し。雷雨霜雪ともに然り。故に天の視る時は拘なく人を視る時は物上下の分隔なかり。故に是を軽賤諸畧にまうべ。成湯の立賢無方こ。孔子の有教無類といふを味わて知べし。禹天罪人を視て

涙とき毎に啼泣せるとそれ刑罰を蒙せるとの。悪事を為せるの由まるを。悪事を刑せるの法に於て當然こ。何で啼泣せるや。微賤のとの学に暇なく。道に暗くして卒に大悪をなし。大罪に陥る。聖人是を刑せるに止むを得ざるに出るなり。聖人生を欲して死を悪く。満腔子皆仁慈の心なれば。父母の子を思ふ心に異なることなし。父母の子を思ふ人善をするに付け。悪をまるに付け。一日片時も愛心の離ることなきこ。又どうらく子ほど愛して懲こなすべくこ。聖人と赤民の父母一日片時も心の民を離ることの如。故に罪人を視て啼泣せる者こ豈

江戸樂舎用

有難きことに非ずや。○孟子文王を稱して曰。道を堅くいだ
くを視ざるが如くと。言心は文王の自ら吾身を顧るに才徳人
に及ばざると思召せり。故に終日乾乾として能勉強し。緝熙の徳
日々に進めり。孔子帝舜を稱して。大智と云へり。蓋智は大なり。
人に問ひ謀ることを嫌はず。唯己の智を用ゐ人を是とし智し。帝
舜の問ふを嫌ひ能天下の人の智を用ひ。己を捨て人に從
へり。蓋官爵祿位は拘泥せざる。故に能く人の善言を聽用する
こと。流るるが如くみな能人より取て善をなす。故に大智と云へり。
孔子孔文子を下問を恥ずと。己より年少の者をもてし。位卑き者

をもて心問を嫌ひ。能人に下り学ぶを。帝舜の一德に
かなふと云へり。孟子曰く。舜天子たり皐陶士たりときは。舜の
父瞽瞍人を殺さば皐陶は如何にせんと問に。答て人を殺す者を
殺は。天下の大法なり。此法今日起らば帝王世々受け来れる必
瞽瞍を執へきと云へり。然らば舜は如何にせんと問に。舜は天
下を棄ることを思へり。敝たる蹝を棄るが如くなれば竊に
瞽瞍を負ひ逃げ。海濱に加れ居り。生涯欣然として樂
んで天下を忘れんと答へられたり。倫の重きこと如此
して。君道毫髮も我私をなすまきと云へり。○左傳は

江戸樂舎用

曰。衛懿公鶴を好んでこれを愛の余。鶴を軒に乗せ大夫と同様なり。重く愛して。士大夫を視ること鶴よりも及ばず。國の乱ある に至る。衆を集めて古き戦計を衆皆曰。君平生鶴を寵愛せ給ふ。士大夫の及ぶ所よ非也。彼果して能く君難を防き救へ。我輩何ぞ鶴よ及ばんと云て。身を棄て禦ぐ者なし と夫無くして終き者ハ鶴なり。無ハなる者ハ臣下し。其臣下を外にして鶴を内よ。其心顛倒錯乱せと夫珍禽奇獣ハ畜ぐき ものなり非ず。物を玩ぶハ志を喪ふなり。聖人の戒め然ども 世の風俗よ従ひ。これを畜ふべき時節ハ遇ハ。もちろん畜ふ。

古人珍禽奇獣を恵むハあ〻なり。此を愛して重く養ふ。 必ず萬民を軽んじて。士君子を疎んぜ。夫の〻なるべ。上下困窮して 國家の衰微と乎れば。これを懼まる〻者の至なり。○夫 億万歳を渉りて。浩然として獨立せるものハ唯人の。故ハ孟 子に。仁義忠信樂善不倦天爵也。公卿大夫ハ是人爵也。古之人 脩其天爵而人爵從之と。爵ハ位也。人爵ハ人の自由にする位 或ハ位を与へ或ハ位を奪ふ。人の自由ハなる故ハ人爵と云。仁 義忠信ハ天の與へたる位なり。人の為ハ奪ふことも奪 ふこともなし。ただ此天爵を能く身に脩まハ。人爵これ

江戸樂舎用

に次〻至るハ此順理。古の人天爵を脩て其人爵の来ると来らざるとを度外に置ハ唯能く道理を楽む者へ強〻人爵を求むるハ道理にあらざるを能く解知べし。○易の否の卦の九五に其亡びんん其亡びんとして包桑に繋ぐと繋ぐハ堅固なること絲云。平生心より我ハ不徳我ハ不才。時運ハ危殆くいうんがはぐき。それ國を亡ぼすであらうとあやぶ〻畏ぶまぶ亡ぼして堅固なること包桑にかゝるが如し。然るに夏桀の言に曰。我が天下を有たるハ天の日あるが如し。日滅びざるに我も滅びぬ若日亡まぶ我亡んと。自満自恣にして。終に滅亡を招けり。左傳に曰。紂人を罪して其亡るや忽焉たり。禹湯己を罪して其興るや勃焉たり。國を興すも國を亡ぼすも唯己を罪するを人を罪するの両端にあるのみ豈畏まざるべけんや。夫上たる人己を罪するの心なれば。下なる者唯上を恐懼するのみにて。上に無理不道のこと有て。其の滅亡に成べき程の事を知て居ながら。これを諂ひかゝて言ハぬ。又こゝの上に告げ上げざる事あるときハ。を申すことあたハざるべし。然れども上ハ誰あるて告る者なれば。なまを知ぶ〻上下否塞し。人情通ぜぬ。桀紂が亡る所以なり。禹湯ハこまを不反まるとの也。君ハ家の太極柱の如し。太極柱とハ中央の柱

江戸樂舎用

を云。此柱中央ニ立てゆゑまさる時ハ四方八面の柱整々として正し。太極柱ハ丸くゆゑとき空方八面従てゆゑも。其正きを本正も。唯この柱ハ人に君とするとの八方八面の規則となれバ。両うゝずんバ有ごゝゝゝ。故ニ曰く。君ゝ為ること難し。豈然らずや

子夏曰。事君能致其身。孔子曰。見危授命。子張曰。見危致命。致命致身ハ。皆其身を棄てものゝ。愛まさるを以表記曰。自献其身也。其身を君ニ献じて我ことゝせざるを云。聖賢の臣道を説示さく事如此なれバ臣下たるとの其身を我ものとせバ。差上る身と君をゝゝ此の如くなれバ自然其身を大切ニ守るゝ。若我身を懦弱ニ劣ておすれば君の身を懦弱ニする。我身我能懦ニ成ゝ。君の身を能懦ゝ身を懦ゝ本慎しまざるゝバ有ごゝゝゝ。君臣有義として。君臣ハ義を以合者なり。故ニ人臣ハ義を重ずること我知ゝ。二心を挾むごゝゝゝ。世の義を知らぬる者の言ニ同く。此ハ家彼ハ大家。よきを夢をゝ彼の大家に仕ることを我乃ハ。妻子を扶助て。一生安楽なるゝと願ども。いまゝ運命来らずと。これ君の位乃貴賤と禄の厚薄と我論じて。己が義不義を論ずることを。君ニ事ゝ面のまゝニ暗く。臣ゝるゝとの云ごき言ニ非ず。此のゝゝみて。空ゝ一生光陰を過ぶ。豈悲しからずや。夫人ゝ立身出世を願ゝ人ゝ無ゝ。然ども義の

江戸樂舎用

立と立ざると全く吉に在り。臣の君に事る、唯精一の誠を尽して立身出世は後にして、君の知るも知らぬも顧慮せざるなり。我誠を尽して立身出世は自ら其中に在りまの世にすべ〻たとへ家を棄て大家に取り入、赫々の臣位に登るとも思はず〻ざる殃を蒙り。卒には父母に離れ妻子に別れて。其身を零落するの患あらん。是順逆必然の道理。且君に家大家の差別はあまた。臣の君に事るに。軽重貴賤の等級は無事。君位の貴物已の福の多寡にあらざるべし。百石の禄を受ても我君に一口受ても我君なり。君貴重一ツにして両様なし。易に乾を君の象として奇数。是其話。夫臣として其君を弑せざる。君の本に拘らず大戮を受るなり。此君は禄大なるゆへ刑を受る事重しと云差別なく。刑戮を受る事一つし。是古今の人の能く知る所。是等を推して君の位禄の大小貴賤はあまた。臣の君に事るに。君の貴物等級を別て事の乃理なきを知るべし。○古人曰。忠の道三ツあり。大忠あり次忠あり下忠あり。道を以て君を化するは大忠。徳を以て君を輔るは次忠。是を以て非を諫め君を救るは下忠。周公の成王に於るは大忠と云べし。管仲の桓公に於るは次忠とす。子貢の夫差に於るは下忠と謂へ〻。夫周公は大聖人。吾倆小人行と是を論せ

江戸樂舎用

人子胥か君を諫て用ひられざるして。君を怨らん其狹量褊心至賢を懸隔霄壤し夫人臣ハ第一ハ僭上無礼を惜むべき事ハ。管仲ハ桓公を相け。諸侯を九合し。夷狄を攘ひ中國を治めるを然れとも。孔子曰。管仲之器小哉。管仲有三歸。官事不攝焉得儉乎。邦君樹塞門。管氏亦樹塞門。邦君為兩君之好有反坫。管氏亦有反坫。管氏而知禮。孰不知禮と器と八器量を云。三歸八蓋の名。官事不攝とハ。一官を兼ねるを云。樹塞門とハ門と堂との間ハ屏を設て見ざるを為を云。反坫とハ盃を反し置処。堂上兩楹の間ハあり。是皆臣庶の事ハして。陪臣の設るものなり。管仲陪臣にして。臣庶の事を行ふ。僭上無礼。故ハ其器量ハ云ふ。余窃ハ思ふ。管仲ハ雄畧を振ふ。乱を撥ふ力ありて。礼讓を以て。國を治る事を知れり。奢侈を大し礼讓をハ。國を治るに。礼讓を大とするもの。上を治るハ。下も礼下を治るハ礼。一日もこれをかくべからず。其礼の次第の有雅きを尊ぶ。故ハ其所為僭上無礼ハ至まる。夫礼ハ君臣上下の貴賤る界の序。長幼親疎の別。衣服宮室飲食男女の差をおもとの也。○易の履の卦ハ礼。故ハ其大象に辨上下定民志と云。解の六三

江戸樂舎用

負且乘致寇至と云り。象曰負且乘亦可醜也自我致戎又誰咎也と。是礼の次第を犯せる戎戒るべき物を負微賤の者乃事。乘車ハ歴々の〻〻車わのるまゝき賤き者う車ゑ乘り。上位ゑ居るゆゑ寇の至ると〻是全く不徳を以て位を犯せゆゑ災を招く〻。僭上無礼乃災害を招くゑ誠ゑ畏るべし。宮室衣服飲食ゑ至るまて。其分を考へ顧て。僭上無礼を慎むべきこと〻。○詩曰。折柳樊圃。狂夫瞿〻と。圃い菜園く樊ハ藩く。狂夫のわるゞるひすることを。論語の狂とハ義異まう。瞿〻ハおそれ〻顧る事〻。柳ハたよわき木わて。特ゑ圃の藩ゑすきハ狂夫と雖ども是をそて惟れ〻。妄ゑ越ゑ乃ものと〻。樊を人乃妄ゑ入るを。制し防ぐゆゑ法度ゑ喩へる也。不道のものも法度ゑ犯すゑ我得ざるを云う。然〻ハ假りにも法度ハ無んばあるべか〻ず。假りゑも法度ハ犯すべきに非ず。是く臣ゑうとの戒慎むべき事わゑあると。其往べきと往べか〻ざると。取べきと取べか〻ざるゆゑ與へべきと與へべか〻ざるとの。義理ハすなわち界〻。界ハ樊〻。樊ハ法度なり。慎んで毫厘も犯すべう〻ず。唯法度わ信ひ君命を重んぜるゑ我第一とすべし。○或曰堅固過多人乃。同藩乃親〻薄くしてよか〻ぬ者〻。余曰かゝすぎるくらゐ。親〻の厚きの

江戸樂舎用

礼曰く。君子之接如水。小人之接如醴。君子淡以成。小人甘以壊。小雅曰。盗言孔甘。亂是用餤と。言心ハ君子の接りハ水のごとく。其味淡く薄くして。しまかざれども。接りをよく遂げ成して壊まぬ。小人の接りハ酒の甘くしまきが如くなれども。ただ小人の接り猷ひやぶるもとなり。盗ハ盗賊のごとくにハ行ずして小人をうつ。小人が眼前よぬすむ成為されとも。其志ハ盗賊と同様なれ。なぜ。後暗き盗人根性を常にあるなり。小人の事を盗とるなり。小人乃言ハ孔ぶかくしまれども。皆いたくあり。其言を信とすまバ多く讒言了すぐハ。亂是よくしてやすくすむ。餤

ハすむなり。夫君子を。小人よりみうるバ。堅すぎてよわくバ。堅すぎること。何で接りに害なし。此礼乃語を推量して。或人の言乃妄なるを知るべし。

自脩編巻之上終

北海道大学図書館蔵

江戸樂舎用